

# 夜のアリット 光のフェスタ —アートなお化け屋敷を つくろう

2012年8月1日～3日 東野高等学校・入間市博物館アリット



2

012年、夏の入間市博物館は光とオバケが集う、アートなお化け屋敷に変身しました。本年度の「SMF@入間」は3日間の構成で、音・光・身体を使ってアートなお化け屋敷をつくろうというものでした。主人公は子どもたち。ワークショップでオバケになるための基礎知識を身につけ、最終日には子どもたち自身がオバケとなり、友だちや親御さんを驚かそうという計画です。最初はおとなしかった子どもたちもオバケに変身してしまうと元気いっぱいになり、意気揚々と友だちを驚かしに行きました。

日が落ちると館内の中庭と外の通路には、光の通路が現れました。ほんのりとオレンジ色を帯びた小さな火の光。お化け屋敷に行った子どもたちを待っている親御さんたちが、ロウソクの光に引き寄せられるように静かにその光を見つめています。

この夜のアリットは子どもも大人も楽しめる

アートのプラットフォームになっていました。それぞれがこの場所で、目には見えないお土産を持って帰っていただけたのではないかと思います。

齋藤はるか (SMF協力委員)

今回の入間市博物館とSMFとの連携開催イベントは、子どもたちの自作自演によるお化け屋敷の興行です。しかも、縁日の見世物小屋とは大違い、アートなエッセンスを盛り込んだ「アリット光のフェスタ」お化け屋敷がありました。オバケに化けるワークショップ、こわい音づくりのワークショップなどを東野高校美術室や博物館講座室でじっくり3日間 にわたって仕込み、いざ本番となりました。

お化け屋敷へ誘うのは光のみち。数百のペットボトルキャンドルや、昨年SMFのイベントで美大生たちが制作したステンレス灯籠を設置してアートな雰囲気を出しまし

た。お化け屋敷は、エントランスホールの階段を上りきったフロアー奥にあるこども科学室。入り口には防火シャッターのくぐり戸、中にはマジックミラーなどの体験用具もあり、お化け屋敷の設営には格好の場所でした。

本番スタート前から、エントランスホールは長蛇の列、さすがにお化けの霊力は凄い。結局はリハーサル、本番のローテーション、タイムスケジュールもコントロール不能の状態でのオープンとなりました。この混乱をなんとか制御不能に陥らないように協力していただいたのが、SMF関係者、大学生、高校生ボランティアをはじめ当館職員・展示解説員・学芸員実習生などの各有志の皆さん38名。ほんとうにありがとうございました。(来場者・参加者：3日間計約500名)

工藤宏 (SMF運営委員)

その日、「お化け屋敷を見に行こう」の受

付は子どもたちの熱気に包まれていました。それもそのはず、これからはじまるお化け屋敷の冒険にみな胸を弾ませていましたから。事前の制作に参加したオバケ役の子どもたちは、スタッフのお姉さんたちとどうやって驚かそうかと周到な準備を重ねていました。薄暗い会場には、吹き付けられた蛍光塗料、物陰でうごめく怪しげな影、ブラックライトで浮かび上がる色とりどりのかたち……。待ち受けるオバケ役の子どもたちは、嬉々とした表情を押し殺して息をひそめています。「ねえ、まだなの～!」、受付に並んだ子どもたちの声にハッと我に返り、受付開始! 10人ずつ会場に入れていきますが、長い行列はなかなかさばききれません。観客の子どもたちはアドレナリン全開! お化け屋敷の中の子どもたちもスタッフも、もう汗だく。

でも、その体験はこれからも、きっとワクワクドキドキから始まる創作の意欲に繋がる

はずです。

小原恵利子 (SMF協力委員)

今回の「お化け屋敷づくり」ワークショップ講師には、地元ゆかりの若手を起用。これまで市内の事業に関わっていない方たちに新風を吹き込んでもらいました。初日は、嶋崎登志子さんが、子どもたちのオバケ衣装と小物製作の指導。2日目は、宮岡和寛さんによる日用品を使った「聞いたことのない自分の音」づくり。3日目は、ダンスインストラクターの佐川純子さんとオバケの動きを考えるワークショップ。

東野高校の美術部員たちが一週間がかりで作ってくれたオバケ幕と大道具を設置し、オバケの子どもたちをその中に隠しこみ、リハーサルの時間も開始。10分間のツアーで、休憩を取りながら1時間に5回という算段でしたが、オープンと同時に入場1時間

待ち状態になったため、次から次へとツアー客を送り込み、屋敷内は常に飽和状態。そのうえ、とちゅうで交代のオバケがそのまま居座り、オバケだけで40人近くに。音のない暗闇で聞いたことのない小さい音が聞こえるとてもこわい—などという前日の学習はどこへやら、オバケたちは勝手に大きな音を立てて威嚇し始め、思いのままに動き出し、通路に横たわったり、通る人の首や足にさわったり。そして、その泣き声や叫び声がまたオバケのエネルギーを倍加させるのでした。子どもたちの中にすでにできあがっているオバケのイメージはなかなか手ごわく、見たことも聞いたこともないもので驚かせてもらいたいという願いはかないませんでした。が、非日常の体験で体の中に眠っている力を目覚めさせるというアートの機能は確認できたということでしょうか。

山尾聖子 (SMF運営委員)